829
.M8N2

岷江入楚

元茇墨

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

花散里

廿四歳　　五月之事也　賢木巻之末ヨリイサヽカ前ノ事也

先參麗景殿女御之許之次乃中川之女之家之前事

麗景殿者故院之女御花散里之姉也中川之女者不見系圖之人也

於麗景殿女御之許三君逢給事

三君者花散里事也

花散里　以歌為巻之名

橘乃香をなつかしみほとゝきす花ちる里をたつねてそとふ

源氏君乃哥也

秘 是乃巻哥よて哥なりへ源氏廿五歳夏五月の事之榊巻

の末も同し夏の事也花ハ六月よりまてのさかりなれハ

夕云花比とミ花にて榊巻乃ゑよりハ花乃事とみへたり　奥入

毛 榊巻ニ源氏廿五才乃夏し此巻も同し夏の事と云り

或抄賢木巻ニ麗景殿乃女御の妹三の君ハ源氏君乃あと

まし〳〵てやかて源氏君かよひ給ひあまたの女御のさき乃ことく

又源氏かの君乃ひとかたならぬ御心さし給ひそ人の心の乱るゝ如く

私云ひ人の事此巻より始ていひ出す所より花ちる里ともと云

麗景殿乃女御の妹にも花ちる里とも羽林河海ニ云

古今集 橘の花ちる里のほとゝきすかたらひしつゝ山ほとゝきすなく毛

郭公鳴く日数を尋ねる毛乃毛ちる里に住人やなれ

人こそ事なし御所にて思ひし花ありしおもかけさいハ

秘 源乃ハ女童朧月夜乃事にかゝりはてし給ふ大かた此

世のつけてものうかりし思し乱るゝとハ白数日を流る

ぬる哥と思ひし事といふ尾

奥 思ふ白虹数日と流るなれハこそ

河ん流るゝハしらぬ事ありとそれ〳〵しと思ひなから

私云此文乃御物語ひといひてもかなしき事也今ハ世乃

物かたりし御方の御心さしもなきにまかりて思ひ世を

思ひ乃御流乃うれへ世のつとめしきに事あり

さしかゝる世のこゝろ也

多く物をもかなしみをもあらはすへし

花いかにいてんとおもひし八

秘 桐壺乃御時の女御之花ちる里の事といひかはせとてなり

花ちる里の婦し　奥日

思ひこゝろあるかたさも

桐壺乃御門の皇子も生まれ給ひし

これちる里の御子なり

いよ〱あはれなる　御子なくてさうさう敷思し
たし給ふへし　源の御ことをまても思し給ふとそ
御おこなひのこと思し　女御のいもうと也
秘花ちる里の事也女御のいもうとは源の恋ひ給ふ人也
またかれてなし給ひ　むかしの里をとはせ給めり
さはしても紀かりうちとけぬ事まてもてなしたる人
人の御心をかけ　此花ちる里なりけるを思ふ事
まて女のこゝろよりなりけるものこそ思へし
此御事をかしこく思し世の衰へさりし此
秘此花ちる里の事なとは思ふ事ありて何やかやと問
何なれはかくしつゝみ給ふとも思ふ者をは思ふとそ
ことさらに恋ひしき方に侍へしありはれの事なとも云へ
思ひやりて　思ひあまりなる衰への後思ひしりけれはとし
五月雨の空めつらしう　おりしもうち紀の折に
なにたりの御ともとひ　何無粹し
世に紛らへ

ござんなともあらく　荒涼ともなきこと
なりけれと　秘京極川と中川と
さくやうれは家　ちいさき紀家へ
秘遍サヤカし　或物云小さ也校こ也何まことちいさき紀とし
よくあらはしとへ何まかと入ぬ
河和琴に能鳴調と云ありけれはいつそしも　秘和琴へ
私和琴はいつの世よりはしまりけるにかと問へは不審
成事也此ハ絃乃惣名なれはたゝかたちの名に笙
とそ云ひよりなる和琴の笠をそへていひし云る説も
ともかくも云へきにもあらぬ事なれは不審なるにあら
さる也よくしるへし和琴乃名をは今は和琴
名に出来して不審出来る事也よく此筝の琴
と和琴とは云かへたる也会せあると云ふや南都今
楽の僻読へ転て易なし
さしいて　秘車よりおりなとさし出て
門をうちたゝくといふ事なり是せたまの家の好色のみ

からまれておもひ風ありける山の河　河海抄巻第十之二

出家なりける梅の葉をもつるなり

河 天雅彦門之湯津楓樹 旧事本記 或云湯津桂木 日本紀

門よ楓をうへたる事見于此雅植之

中らに一めぐり語りし　花ちる里へおはしまして

の事に源氏君のおぼしめしたるに此巻に始て

いひ出させり

秘 此家のあれども弟の源のかよひのひしへなるへし

此巻の始は出仕の事なれは行色をうたとりて世の

時の類なるへし　来目

中らもかしこくへりもとめ　なとおもふなと云

やりのかの源のんし

おかしきのやとに　あをしくしさかといふかめなる

少女に此巻より思ひのへて郭公よ此あそ

色かそてふ　河 維色し

時るなるまてまう深にはし少しかなりたれは

已云モヨホシキコヘカ李ルトハ行色名カカルニハシカストモヨホシメルヤウナルト云心也

少女に此巻よりをひのへて郭公のりよりむもし

或拾遺注に郭公鳴あをさけは河にも成ると心を消ける

と云奇のかかり仰ありへし　引奇にきあたりとる

御車をしたてさせ

隠ゐたれし　のやうの御出ありなれおなかのゆやれ

秘 源の車をは門の前へよし立とて

おもしろくありてて思ひもとね郭公あのあつかひし　宮の垣ねよ

むおもしろくありは百葉集に八百年とせり

秘 かののうちらひしと云そてもしのひのひのしと云垣みてより

おもしろくありは百年の后とせり　涙ほ思ひして行色んとし

つまとも錦りかへしつくて思ひさたそこし　此分細字よ分不注也

私おもしろくありは郭公よ云詞之いくらくありをあつ鳴と云し

きん家と見へしこと屋れ　ちいさき家の屋なる寝屋の錦り

にきありは寝屋と見へしこさうといへり

それしくも少しし見てなれは　秘 惟光も又内の女房也

色来に承を少知らし惟光の人よ是れし少書の承る者れ

知らんと云ひしくこしは怪くかなたるへし

八

あかとくなりゆくへし　源乃御ところへまうしによりてかや
うゐのふなりこれくれよくはあらしとしてさへらや
うちきこゑ南わとみてゐたり
時ゆあかてとハいさかれなるほかめつれぬ月夜の宮
内ちかきの家事之樋木のちかき家中川なりし
秘 内よりの家事之時かいふしきし源氏のかくれありし流よ
あれおかしあれともあるし　奥同
式部御説云惟光こハ修理せられてそこ女御も河まゝいかうふ
左ハそれわんしんなれはいふぞ
私云ノ本にうつすあやとこまえ月夜の絵をおかつれたよし
さはさうにもとゆし　秘 よそにせめしくし先にゝて出と
これ惟光かんなわ
よしられし垣ねもとて
こ茂られハみへしさゝへし蔵りけひかり　河ちこなりとよりてこゝのまか
同 荻ちりし庭の秋も茂り合てかきさへもこそ見えて
秘 もちりし庭の秋惟光にかなりせらるゝんはいり

使者引寄同し惟光を召しておかさして　奥同
私云かへし垣ねとし八源の御うへ御まちかへの心得かたりて
此ゆへにたり秘とも思ふはかなしきさまとて免角いて
人知をぬかりけり
同 此人し御ぬしに此方の後頼よ人知ま石御心流すま乾二つしさと
秘 門所女の心あし今此まも我よりしけし
あこてもこの女ちやかくゝ人をしるまゝハ随なけりし紙のんも
あらへし此詞も此会くゝ見りへし
奥 惟光うそらおかりまし申るを女
科こりも象あも
れ科くらふとなり
さうも流くもへかにかそへし
思ひのかさりし有よもし無かりうにせいうとし
私云此義ハうく女の事とも見りへしとやうりく人あるとゝ
とみてしるれハつもし道理と覚えとし源の心し
あられハさうたりたり　さうへ気と覚えし在し
ぬしさくゝ由りうらうの御心のあしハりゝ清へし
流らしれめ哀れり
秘 源乃娘読んちものゆへ　此所義写同

河
本朝月令云五節舞者浄御原天皇之所制也　勘物乙女考
私大蔵唯今執紫になりて五節の盡しみしかり
浦へ御音信申ありしさやうなることも序よいひ出すべき
只今中川よりの人同しことのへしるしぬをしらと
読へしそしハ添ゑそ　そもそもハ渚織を渚地を
ゆかりにつけても　よしあしに付き侮しふんを見し
珍しく多し心なりわ
中く何まてこれ人へ御恨之ひくことなり　秘　各わしく成て思ひしへ
孝人も何やうにまても音信之のふまらすてく人への恨之ひとなし
心之中しとて宇あり添へし
なを定れ不まゝ　秘　蘂京居れいおくろ添へし　花ちの里も一派よ行き道
おもし尊りつるもとろく　道ら源のこひしとく人へめ
なく何まきゑかと
あられなり　源のかなりわ
女御乃御もかしまて　秘　蘂京ゆらこなりわ
むかしの御も乃ゆかり　桐壺の御代乃事あるへし

廿日の月さし出る　秘　夕月夜法ありあかた庭せし
風涼しくて　奥かり
いはここゑかの給せことく　新緑も此時分一際と盛り
あふきのくよりていとしいくり花鳥は木かう沉法花こちらこ
よかへし添りとまそてこうこてハ立とくしきんれうめ木
こそ大さきあるといふなるへしとさし
ちり給もちこちれゆかりけり
河　玉史云垂仁天皇九年辛
酉春二月庚子朔天皇命田道間守遣常世国令求非時香
菓今謂橘是也十九年秋七月朔天皇崩明年三月間守至自
常世国貢物也非時香菓八竿八縵焉間守於是泣悲歎之日受
命天朝遠往絶域万里踏浪遥度弱水是常世国則神仙秘区
俗非所到是以往来之間自経十年豈期独凌峻瀾更向本
土乎然頼聖帝之神霊僅得還来今天皇已崩不得復命臣雖
生之亦何益矣乃向天皇陵叫哭而自死之群臣聞皆流涙之間
守是三宅連之始祖也
橘ハむかしを思ふ沉よしく女御かへも当国の橘なと面白き様し

秘　桐壺の御歌の

とられてたれなるも御おもしとそ

みことと今さひ出のかさ

此うたは夜花ちる里によく似かよふなるへし

うちかへさ給ふ　源のなくさめ給ふへく

時鳥まつ垣ねのよや　毛中将の前の垣ねに

秘　おりしも源さんかぎりは此雨の夜とも花の月さし出てるも此

頃の五月雨の晴間珍しさに其ふら花ちるさとの郭公の鳴そ

なといひなしかしまかしく何を感してたるへし

おれしなうようしろかき　同声ふなしおりし給てなきそれ

かはらぬかぬかぬと云ふた弁の人なるへし

ちるひとこにまちうよの夜　まうし垣ねのかたまさりける露のことし

いふかしつるまてゝ　何いふかしきへはかのしらまえ

いへかしつるそつ南風まてまよもる　なく声ぬまま　伊勢物語

私云秘にいふあまりてそうちかしれなかは古今にいふなら伊なら思

よ鳴しようりまふか人まよ鳴と人はかへぬう云ふさ

つもそふとおもむしとかふ人狂まいらるし

あやなかしれ源ありよせていつさる世うし的表の秘かねと　これは

郭公ともなくよそにいつこ何事とそも川冊にはけつり

源氏　あちらもたえをなつしし郭公花ちる里とたえそそふ

同　植乃おもをなるつしも時なるうへひしつなかれ日そなき方

同　方　植の花ちる里にひとのひかへてあくは山郭公ともよ夜せんかな

家人集云　郭公鳴てく日数とるあめらちこれの色あら里よ花人やあまま

うちひとの　ひとこゑの中乃　ありてき我は

こゑやうちに　訓ては鳴けん　日をとりまれて

卯乃毛せん　咲か咲かへ山　こゑやおり

あらちもと　花とぬらし　こひかへり　こゑまとりとく海

まいさたち　来りたる　日添りは　なけは泣よし

こゝわれたれ鳥　まさやとの　花あちもあり

秘　植せんいひをなんし　ーーー

植せん花ちる里にーー

古今集二首とも会なる事しあ人名ことよりむかしつり

松二首か河海に寄く此是も斎乃の人を植は苦とふ

おつけて今女御なりとてハ花流の代々代々ある事ありけるとて慰〔前人〕
なしそれとなかりしこひしき気ある比ノ卿ニ此樋
とくて今源のおつしやる事とかいへるこひの人給
へ身しき代釣ノ次ノ釣りそん乃人てしまり
いかし〔あかるる紀〕し紀　　花そより源氏の詞し
秘 源氏の女御〔ト給ふとも給〕し
待さる所とおとるもすそへしとも　　契 在云と給りてある
秘 さとり川すそ悦しきさの数源そゆへし
かやうに御指仰ト右ハ出ひの庭をにもし給ひありひのまえ
事もあらとし
大きいの世とりちくうふものなれハもりし給りしも
人おもふ公ハ当世の時よおふとおもふる程なれハ源なるの昔
給り八友もなかうし昔のあらすといひ生まハ必と当時とそし
る程なりし甚時よ色あり〔昔の事ハさてありける給へ〕
うこふ川せう〔ここゆ〕 此程給く昔の事と言し出て給る
なさとへり源りける事とりいう程乃んと

う紀にそこそ〔こかとるこな〕う紀ノ川出そ〔こかとるこ〕こな日し
ましていふなつましくも　源氏河あるこそはさいとそ給さへ
もりし乃友ふあく給ふともして女御ハかやうにて乃ち後
むまやせるさふことこそし川りてトのふ絹し
楽いとなりうなる世なれと　前 花ハ女御乃の事を源の人
かりふひのあるし
秘 女御乃の事と花ちかつる義いふく
私いとさうかなる世なれとハさりなる世と云んと給
女御かんかり給ふ個なうひの世なれと花願まて源
の前ともかれさ後とおはよかんのふて人かん御さ後から
よやよは源の御さ後乃そくれ給ふかう一しかわれハ
まとよかん程とし
又女御
人のなる紀おまえるの宿ハ植の花とて新のつましとおくれ
当世ノとなうりのましくあり奇とし一
私植乃花ちの果と寄のし源の宮へハ被花とて里
余りされと云なりへしうらむとさありの許の仮也

むもちの里によく似かよへし
さハいへと人かりいひとおもひしたりけり　少女ハ前よりもまされて
これなかれなる御おもひしハなかりしかといへりけてさはいと
も人へりおほしなかなと源乃おもひそく
秘 花散乃御時さ女御なとは これなかなかなんなりけりしを
今ハ世りハやられ人へもまれなりとこたらへおほせ
思案さはいへともよいおよ意給のひし中河ちうり成尊 思案以下細字に注とこ
なりにを沙のへうまあのうさはんへ
私云秘ニ思案とて我かれ心の義ハおかしつのる
みおりてありハけさう心たへし
源の思なかりの海し女御とつふうひのふ次うなかよ　花ちる里ハ住給ふこと
いふかたわうしたとしはいつかれ
はらうさもあまねへし　私花ちる里ハ色を尊して出り
秘 冬つかりしはりのちうへもと御ちさ海りて思ま給へ也
おかさねへのよはおもくさうかへし
秘 佛そのうちの申こと
むもちの里ハいひのふこ

源乃御心かりもあわさうぬ事をうれしまてハかうひめれし
と女はさふ庵しいれと存して出の死　或抄同
うりみしつ人のまふうまりハ　少女花より葉子地しとこ
秘 源乃見のかへ申にさのを紫式こさんなかへさなしれこ
さ海くよつけていふつひなしれおかさうかハなかれハうや
いふひなさりとのへりいよりかたら〇いよやとし
みく宗なくられも人へも
てなつし人へさは花ちる里とさ海りしに姫給おゆしとて里り
秘 源乃かし　常なとうしみはし
し人てん思ひも宗にの秘そは花ちる里かーとしてへ帰り家
も人へもとは源と女とかふ乃事とこと
秘 ちらかしもとかうとあひなし
あきと河ひなしれ
とこひこくめつかとうしこと給ふ宗りしさうかさと源姓と
私それをあひなしれハこの人乃かうかとられしく
うへとて中将なへもまうとそれをしかとこひく
源乃うらを給りねとと
愛りかくふ
河
左右

世のさかは　　世乃なからひ絶しよりかれ枚替し
悪ノ字ノ義也
こひなしのまゝ　　源の心也
きこりかうきこ枚　　秘中川乃宿風事し
よく乃中川乃宿乃女てうちえとうしとてあらぬ枚波
出来なかれとこし
八ゝ草子紙とみしなり

秘拾別記奥ニ有

一　ちくかるゝとゆつもふちへゝ　　荒もよくかる河川
傍しと候ちくもへしかへし也
一　きさはりてかし給ちかなり　　さうかは間て源の御
古今もちてなから候ゝ事ハなかれと荒ちか置の御言ふと

何と思へまうへ申とし
一　此趣流顛倒之見不とまうしをかく也　三重給り枚乃下に此流給ゝ
事あるあをしらう衛ゝ世風衰乃くさりひ以下ノ羽と入
こひ出のふかゝ乃下にうちはらとてかし給ちかまの人風んを
とのさえしらそ給ふ庵ち免るとゝふ羽とふさく世民
かうくて此月夜乃更けとも此方ら見也
一　こゝゆふそ夜さうかゝ事もかすそふ　荒もたふさ世すま
ちかうふ趣なかれハ乃張と言へいまで見るのへ申気式色に此ノ
人からり
一　いはさうかなか世なかれと　さうかるといふもやよわ
何事もせうりぬとくにてあらてさうかなか世事なる
其中にもいはも衰なるとも給ふなり人へ一流寒に
さうかる事なれともうり世風御前かりのみふこゝもふと
とまりけうあちへとよいありひ出しなかる心人とふ翁
はなしまりなりひ風やか事なかれともちかくいふか
かうし

已上秘抄之奥ニ書入アリ　去梅与氏